

メルロ＝ポンティにおけるパロール ——現実の創出性と歴史公共性をめぐって

野々村 伊 純

はじめに

我々は言語を用いて自分を表現し、他者の想いを理解し、時代や地域を超えて様々な考えを学ぶ。はつきりとした起源が明らかにならないまま、言語は常にすでに人間社会において作動している。言語が人間のあり方をどれほど規定しているのかについて論争があるにしても、少なくとも言語を切り離して我々の存在様態を理解することはできない。

M・メルロ＝ポンティは、知覚というあり方に近代の主流な哲学的立場が見逃してきた実存の領野を見出した。言語に関する彼の思索は、とはいえ、その知覚の哲学を単に応用しただけの派生的な議論ではない。一九五一年に発表された「言語の現象学について (Sur la phénoménologie du langage)」によれば、言語の現象学的思索には、言語をさらに基礎づける「より高次の段階の解明の余地」(S, 116) はもはや残されていない。ここで言及される言語は、「完了した事実、過ぎ去った意味作用の残滓、すでに獲得された意味の記録」(S, 107)、すなわち言語学者が客観的に観察する際の対象ではない。むしろそれは、生きられた状況のうちで主体が取るコミュニケー

ションとしての表現活動、すなわち言語行為バロールにほかならない。とはいえ、パロールという生き生きとした言語現象への注目は、単なる言語に関する心理的な経験の記述ではなく、むしろその内では私秘的な心理的状态を超えて他者との交流が遂行される、相互主観的な生きられた世界への還帰を意味する。メルロ・ポンティにとってパロールへと立ち戻ることは、それ自体実存の領野を明らかにすることになるのだ。

言語に対するこうした見方は、すでに『知覚の現象学』（一九四五年）で主張されている。この著作には二つの主要な主張がある。すなわち、〈語は意味を持つ〉と〈言語の経験には語る主体がいる〉というものだ。これらの主張は、〈語は意味を持たない〉と〈言語の経験には語る主体がない〉という主張の否定として論じられる。これら批判される二つの見解は、メルロ・ポンティによれば論争中の言語理論から引き出される共通の含意である。しかし、論じられている主張は、そもそもそれ自体何を意味しているのが問題になるだろう。なぜなら、批判される見解は一見したところ奇妙で、その否定はあまりにも当然のように思えるからだ。この点に関してメルロ・ポンティの議論がそれに尽きるなら、この議論はトリヴィアルなものになりかねない。彼の言語論にはどのような哲学的意義があるのだろうか。

本稿は、『知覚の現象学』でメルロ・ポンティが論じるパロールを考察する。彼の言語論に関してテキスト内在的な研究は蓄積されているが、この著作の背景にある哲学的な議論からの考察は十分になされていない。そのため、メルロ・ポンティが依拠する文脈の解明は、彼の言語論を持つ哲学的意義を捉えることに寄与する。そしてこうした考察は、言語が我々の実存とどのように関与しているのかを解明するのにも貢献する。本稿は、メルロ・ポンティが活躍する以前にあった言語理論の一端を定式化して、それと彼の議論とを対照させる。本稿が記す哲学史と心理学史は単純化された素描に限られるが、とはいえメルロ・ポンティの言語論の哲学的な意義と進展を理解するのに役立つだろう。『知覚の現象学』で批判される立場は、伝統的な言語理解に依拠したものであ

り、この見解を批判することで、新たに形態創作的観点を提示している点に彼の議論の哲学的意義がある。他方で、それは伝統的な考え方の一面を批判することだけに留まっていることもまた明らかになる。後者の言語における歴史公共性の第一義的な重要性に関しては、一九五〇年代になって積極的に論じられるようになる。

以下では次のように議論を進める。第一節では、伝統的な言語理論に見出せる二つの基本的なテーゼの内実を取り出す。第二節では、伝統的な言語理論に対して向けられた二〇世紀前半の批判的議論における二つのテーゼを示す。第三節では、『知覚の現象学』を検討し、彼の積極的な立場において言語が反復的な像ではなく世界を創的に形づくるものとして捉えられていることを明らかにする。第四節では、『知覚の現象学』において言語の歴史公共性の第一義的な役割が認められていない点を論じたうえで、この点に関してその後の論致に見出せるメルロ＝ポンティイの見解の進展を明らかにする。

一 伝統的な言語理論の諸テーゼ

言語とは、その意味を指示する記号であり、その役割は主体の思考を他者に伝達することにある、としばしば言われる。G・フレーゲによって始まった言語論的転回において、言語は論理的意味論の観点から論じられる。とはいえこの転回以前には、その有意味性や産出性に限られない観点から言語は論じられてきた。本節では、言語論的転回における議論とは異なる言語理論の内実について、特にE・カッシーラーの哲学史的記述と一九世紀の心理学における用法を基に検討する。カッシーラーの哲学史を取り上げるのは、メルロ＝ポンティイが一九三八年に脱稿した『行動の構造』において、カッシーラーの論致「言語と対象世界の構築」が肯定的に参照されており、彼の思想がメルロ＝ポンティイの言語論に早くから影響を与えていたからである³。また、心理学における言語の

理解を参照するのは、メルロ＝ポンティが失語症に関する当時の見解を批判的に検討することで、『知覚の現象学』において言語を論じるからである⁴。

先の論攷においてカッシーラーは、模倣説 (théorie de la copie) が言語に関して長く支配的な見方だったと指摘する。この考え方は古代ギリシヤにすでにあった。ストア派は名称の「客観的な」妥当性を肯定する。対してソフィストは、それを否定して名称の人為性を主張する。前者にとってみれば、言語は現実と連関し、意味と名称の間に自然的な類縁性がある。他方、後者にとってみれば、言語それ自体は、精神に、個別的な感覚が持つ固有性や普遍性をもたらさず、単に他の人たちと共有されるゲームのルールにすぎない。ゲームに参加する成員が増えれば増えるほど、そのルールの強制力は強化されるが、それはルールが持ついわば「貨幣的価値」[Scheinwert] (Cassirer 2010, 135) がより実効的となるだけで、言語に現実と直接的なつながりがあるわけではないのだ。

とはいえ、カッシーラーによれば、こうした古典的な論争も「認識は事物の本質を、言語はその認識の本質を反映し、再現する」[nachbilden] のが課題である」(Cassirer 2010, 133) という根本的な前提を共有している点で、問題設定の形式自体は同一である。名称が主観的な思考の範囲だけに関わるのか、それとも現実の存在領域と密接に関わるのが論争になっている。言語が現実とどれほど関連しているのかに関する評価は異なるにしても、いずれの立場も言語が現実の本質の像であることは認めているのである。

言語に関する考察は、R・デカルトの観念の理解によって新たな一步が踏み出された。彼が提案した観念の考えは、それを踏まえたJ・ロックによって確立する (cf. 神野二〇一)。ロックは、『人間知性論』(一六九〇年)において観念を、「思考するとき心がたずさわることのできるもの全て」(Locke 1975, 118) と定義する。つまり観念とは、心的に把握される対象の全てであり、普遍的で論理的な概念と、個別的で心理的な感覚のどちらも含まれる。それでは、こうした観念と言語はどのように関わっているのだろうか。例えば『人間知性論』の第

三卷第二章では次のように記されている。

語は、その一次的ないし直接的な意味表示において、その語を使う人の心の中にある観念のみを表し〔stand for〕、たとえこの観念が、その表象すると想定される事物からどれほど不完全に、あるいは不用意に集められたとしてもそうなのである。(Locke 1975, 3.2.2 強調原著者)

言語は心の内にある観念を表示するとされ、必ずしも現実の本質を反映する像というわけでない。言語はただ精神が持つ観念、話し手の内的表象だけに関係している。そのため、カッシーラーが指摘するところでは、ロックにとって言語の分析は、それ自身が目的となるものではなく、観念を分析するうえで有益な手段であると理解されるにすぎない (cf. Cassirer 2010, 71)。

こうしたロックの考えは一九世紀の心理学における基本的な前提にも見出せる。アメリカの近代心理学の父、W・ジェームズが批判している、当時の「能力主義」的骨相学 (phenology) の考え方をその一例として取り上げよう⁵。能力主義の心理学は、心理的現象を統べる器官を想定したうえで、次のような言語に関する心理的経験の説明が自身の目的と考える。

例えば、言語の「能力」について取り上げよう。それには実際のところ多くの異なる力が伴う。私たちはまず具体的な事物の像と抽象的な性質や関係の観念を持っていなければならない。次に私たちは語の記憶と、それぞれの観念や像を特定の語と連合し、その語が聞こえたら直ちにその観念が心に浮かぶ能力を持っていなければならない。逆に心の中に観念が生じたらすぐに、それをその語の心像〔mental image〕と連合し、

その像でもってその語を物理的な音として再現できるように構音器官を刺激しなければならない。(James 1918, 28-29)

こうで像 (image) と観念 (idea) が、より具体的な感覚的意識経験に関わるのか、それよりも抽象的な意識経験に関わるのかによって区別され、ロックの考え方をより精緻に発展させている。語の心理的経験は、語の音声や書字といった聴覚的・視覚的心像と、その語の意味に当たる心理的経験によって構成される。このとき、語の意味は観念と像のどちらもありうると思われる。なぜなら、語が喚起するのは具体的な感覚経験でもあれば、抽象的な性質や関係でもあるからだ。いずれにしる、言語は心的像によって構成され、その意味として何らか心の存在が指示されていると考えられている。

このような心理学における言語理解は、一九世紀に確立する古典的失語症理論においても共有されている (cf. 波多野ほか、二〇〇二; Bimbenet 2004, 63-66)。骨相学の提唱者F・ガルは、言語能力と大脳皮質に不可欠な関連があると主張したが、この見解はP・ブローカにも影響を与えた。ブローカは、一八六〇年代に脳を損傷して構音能力を喪失した症例を報告し、失語症という病症を確立する。一八七四年にはK・ウエルニツケが、ブローカが報告した症例とは異なる失語症、すなわち聴覚的な言語理解に関わる感覚性失語症を報告した。ウエルニツケはこれらの症例を統一的に理解するために、言語の運動表象 (Bewegungsvorstellung) と音響像 (Klangbilder) の中枢を想定し、それぞれに対応する脳の領野を特定した。つまり、脳の特定部位が損傷することでブローカ失語とウエルニツケ失語がそれぞれ生じるのである。一八八五年には、リヒトハイムがウエルニツケの見解を発展させ、「概念中枢 (concept center)」を想定したモデルを構想し、二つの言語中枢、概念中枢、そしてそれぞれの結合のうち、どこが損傷するかに応じて失語症を七つに分類した。このウエルニツケーリヒトハイムの図式は広

く受け入れられ、神経心理学の古典的学説、大脳機能局在論が成立する。このように、言語は物理的記号を知覚したときの感覚的心像と、語の意味としての一般的概念の二つの側面の結合として理解されていることが見出せる。

以上、カッシーラーの哲学史的記述と心理学における言語の考え方を辿ってきた。こうした記述から以下の二つの中心的な考え方が取り出せる。第一に、言語の本性を現実の本質や心的対象を指示したり、代理したりする像と捉える見解である。こうした模像説に関してカッシーラーは、存在やその構造がすでに出来上がっている現実が主観に与えられているという、さらなる前提があると指摘する (Casirer 1933, 18)。そのため認識論的な問題は、主体の認識とは独立に自存する世界の本質や性質をいかにそのままの仕方で意識のうちに写せるのかという点にあり、その反映が忠実であればあるほど認識論的に価値の高いものとなる。こうした一層忠実な反映を希求することが意味するのは、認識された対象の反映とはただそれを反復しているにすぎないという見方である。こうした反復というあり方に像の固有性があり、言語も反復としての反映であると捉えられる。こうした特徴を持つ見解を次のように定式化しよう。

(1-1a) 言語の本性に関わる像テーゼ…言語とは確立している認識対象 (現実や観念など) を表示する像である。

第二に指摘できるのが、言語の役割についての考え方である。これは心理学に大きな影響を与えてきたロックの記述に見出せる。先に引用した箇所の前後を引こう。

人がこうした印を使うのは、自分自身の記憶の援助に自分自身の思想を記録するためか、自分の観念をい
わば他人の目の前にもたらし置いて置くためか、そのどちらかである。「…」ある人が他の人に話しかけるのは、
理解されたいためであり、話の目的は、そうした音が印として、話す人の観念を聞く人に知らせることがで
きるということである。(Locke 1975, 3.2.2 強調原著者)

ここでは、言語は自分の思想を記録し、他者に伝えるために役立つと言われる。「印」としての音は語を構成す
る聴覚的観念を指し、こうした観念から成る語が表示する話し手の観念を聞き手のうちに喚起させる。すなわち、
ある特定の感覚的観念を喚起させられる記号は、話し手の観念ないし考えを具象化し、他者に伝達するという道
具的用途として理解されているのである。こうした考え方はすでに検討した心理学にも容易に見出せる。したがっ
て、言語の役割に関する以上のような考え方を次のように定式化しよう。

(一―b) 言語の役割に関わる私的な思考の伝達テーゼ…言語は、私的な思考を伝達するために、話し手の
思考を聞き手の意識のうちに喚起させるのに役立つ。

以上、伝統的な言語理論に見出せる基本的な二つのテーゼ、すなわち言語の像テーゼと言語の私的な思考の伝
達テーゼを定式化した。

二 伝統的な言語理論に対する批判的観点

本節では、先に明らかにした二つの前提に対して二〇世紀に明確となった批判的観点を跡づける。前節と同じように、カッシーラーによる哲学史、および心理学における議論を観点にしてこの課題に取り組むことにしたい。

(a) 言語の本性についての批判的理解

カッシーラーは、I・カントのいわゆる「コペルニクスの転回」の認識論的意義を、単なる模像説からの転換として評価する。カントの「主観の自発性の作用 [acte de sa spontanéité]」(Cassirer 1933, 19) を理論的認識だけでなく、精神の形成作用のあらゆる様態に適用することで、精神の認識機能のうちには、対象のうちに現れる性質や本質を反映する像を産出してただ反復する作業のほかに、その対象自体を形象化する創出力がある。この場合、像は単なる模像ではなくむしろ原像を作り出す作用を表している。カッシーラーの考えでは、W・フンボルトは、こうした批判哲学によって明らかになった認識に関する基本的関係を言語の領域にも見出した。

彼〔フンボルト〕は、それぞれ個別の言語は対象の表象を形成するのに寄与しているのか、言語はどのような形成を行っているのかを示す解釈と分析を求めた。彼の見方では、言語の差異は音声や記号の差異ではなく、世界観の差異から生じる。(Cassirer 1933, 20)

こうしたカッシーラーの立場は、先の言語の像テーゼの批判的見解である。(一―a)ではすでに出来上がった現実を反映する像として言語を捉えていたが、フンボルトに従えば言語には伝統的にすでに確立しているとさ

れていた現実の方を形づくる働きがある。こうした機能をカッシーラーがどのように哲学的に正当化しているのかについては、彼のシンボル形式の哲学を検討する必要がある、ここでそれを十分に論じることができない。代わりにこうしたあり方を示すものとして、カッシーラーが指摘する事態を取り上げよう。彼は子どもの成長過程における「命名への真の熱中」(Cassirer 1933, 23)にこうした創出的形態の事態を見出す。成長した子どもは、単に事物を指す名称があることを知るだけでなく、あらゆる事物に名称があることに気づく。この決定的な瞬間に達した子どもにとってみれば、名称と対象は切り離されるものではなく、両者は絡み合い癒着している。そのため、子どもにとって名称を尋ねることは、その対象の呼び方を知りたいわけではなく、むしろそれが何であるのかを知ること、すなわち対象そのものへと至る道行にほかならない。こうしたカッシーラーの見解を次のように定式化しよう。

(二一a) 言語の本性に関わる創出的形態化テーゼ：言語とは現実を創出的に形態化する過程である。

(b) 言語の役割についての批判的理解

二〇世紀になると、前世紀までの心理学で前提にされていた言語理解も、批判的に検討されるようになる。失語症研究においては、J・ジャクソンが古典的学説に対する批判の先鋒となった。彼は言語使用を、思考が表現された命題を扱う高次の知的な使用と、習慣的な言い回しで自分の内的状態を伝える感情的で自動的な使用とに区別する。そして、失語症患者においても、具体的な文脈や背景が伴う場面では感情的な言語使用が保たれていることを多く観察できることから、失語症で失われるのは命題的な使用に関する能力であると評価できる。こうした考えは、今日でもバイヤルジェージャクソンの原理として知られる。A・ゲルプとK・ゴルトシュタインは、

ジャクソンの考えを引き継ぎ、全体論的立場から言語、行動、知覚が同じ機能の異なるタイプの發揮であると主張する。こうして、思考の表現だけに縮減せずに言語を捉えることの重要性が心理学のなかで共有されるようになった。

このように心理学では、(一・b) 言語の私的思考の伝達テーゼが批判的に検討されるようになった。ここで取り上げたいのは、L・ヴィゴツキーによるJ・ピアジェへの批判である。ピアジェは、子どもの言語には自己中心的言語と社会化された言語があると主張した (Piaget 1984, 22-32)。彼の観察によれば、子どもが遊びの中で行う発話は、ただ行動に付随して生起するだけで、何の機能も果たしていない。さらに子どもは相手に向かって話さず、自分に向かってだけ発話している。ピアジェはこうした伝達の意図を持たない言語を「自己中心的言語 (language égoцентриque)」と呼ぶ。この言語は成長するにつれて消失し、その代わりに頼んだり、命令したり、他の人と思考をやり取りしたりする知性的・社会的な思考が發達し、「社会化された言語 (language socialisé)」が現れるとされた。つまり伝達の目的を持たない自己中心的言語から伝達を目的とする社会化された言語へと推移するのである。反復や独白にすぎない子どもの自己中心的言語が發達とともに不完全なものとして無くなると評価する点に、言語の第一義的な役割を私的思考の伝達と捉える(一・b)が前提として働いていることが見出せる。

ヴィゴツキーは、『思考と言語』(一九三四年でこうしたピアジェの考えを批判する。彼によれば、子どもにとつて言語は、ピアジェが考えるように非社会的なものが社会化される (socialized) ものではなく、はじめから社会的 (social) で周囲へと働きかけるコミュニケーションを意図しているものである (cf. Vygotksy 2012, 36-37)。そして、こうした社会的な言語の機能が、發達を通じて他者へと私的な思考を伝える外言と自分の課題を達成するために機能する自己中心的言語へと分化する。自己中心的言語は何の機能を持たない現象ではなく、子どもの行動と思考が混ざり合っている現象なのである。さらに彼は、それが言語的構造を持つ内的な思考としての内言

へと移行することを、観察結果の報告と共に主張した。内言は無音の言葉でも純粋な思考でもなく、社会的な言語の個人化によって成立するのである。

以上の一連の議論に見出せるヴィゴツキーの主張を、ニューマンとホルツマンは次のようにまとめる。「発話には社会的に組織されて生産される、子どもは歴史的存在である、発話の学習とは歴史である、そして、思考／発話は人間という種がもつ本質的な《生まれながらの自己中心性》の「外側」に向けられた表現ではなく、「内側」での精神的行為を産出する社会―歴史的活動である」(ニューマン&ホルツマン二〇二〇、一七七)。つまり、言語は私的な思考を他者に伝達する点に第一義的な役割があるのではなく、そうした個人間の活動に先んじて、子どもがその内へと参与する歴史公共体として現存している点に役割があるということだ。これは言語が社会的な約束事として単に通時的に存在することを指摘しているわけではない。なぜなら、ヴィゴツキーにとって言語獲得は、自分の思考を表現する際に、広範に流通し、容易に他者に伝達できるといった実効性の観点から、特定の言語体系を選択するというようなものではないからだ。むしろ主体は、他者に呼びかけるために自身の周囲の歴史公共体へと参与することで、初めて自分の思考を表現できるようになる。言語は第一義的には私的な思考の伝達に役立つものではない。むしろそうした私的な思考が成立するための条件として思考を保存する役割がある。この点で言語は、歴史公共体というあり方のうちに存するのである。

(二一b) 言語の役割に関わる公共的保存テーゼ…言語は、各人の私的思考に先立ってそれを可能にする条件として歴史的公共体のうちに思考を保存する。

本節までの議論をまとめよう。まず伝統的な言語理論においては、カッシーラーの哲学的記述と十九世紀の

心理学の考え方に基づけば、(一―a) 言語の像テーゼと(一―b) 言語の私的な思考の伝達テーゼが前提となっていたと言える。そして、これらに対する批判的観点として(二―a) 言語の創出的形態化テーゼと(二―b) 言語の公共的保存テーゼが二十世紀になって主張されるようになった。

三 『知覚の現象学』における伝統的な言語理論への批判

メルローポンティも『知覚の現象学』において伝統的な言語理論を批判している。その際に彼は、言語活動の結果の分析ではなく、パロールという生き生きとした言語使用の記述へと向かう。本節では、『知覚の現象学』では前節までに論じた伝統的な二つのテーゼに対して、(二―a) の観点から批判が行われていることを明らかにする。

『知覚の現象学』第一部第六章「表現としての身体とパロール」では、言語に対する「経験的あるいは機械論的心理学」(以下、経験主義的心理学)と「主知主義的心理学」との間で行われている当時の論争に、二つの共通点が見出せると指摘するところから議論が開始される。その共通点とは、語る主体が不在であり、語は意味を持たないというものである。

経験主義的心理学として整理される見解には次のような特徴がある。

語を持っているとは、第一に「語の像 [images verbales]」の、つまり発音されたり、聴取されたりした語が我々のうちに残す痕跡の、単なる現存として理解される。この痕跡が身体的なのか、「無意識的な精神活動」のなかに沈殿したものなのかは大して重要ではなく、どちらの場合であっても「語る主体 [sujet parlant]」

がない点で、言語に関する考え方は同じである。(PhP, 203)

この考え方は、内観をその方法とした一九世紀後半のW・ヴントの実験心理学や、それを批判的に発展させた二〇世紀初頭のJ・ワトソンによる行動主義心理学を再構成したものと推察できる。この立場では、語の所有は語の音声や書字に関する感覚的像の獲得である。そのとき、それが刺激によって神経機構のうちに生じた興奮によるものなのか、それとも観念連合によるある特定の意識状態の出現なのかは些細な差異となる。なぜなら、語それ自体を志向する主体が伴わなくとも、身体的機構や意識状態の連鎖によって語の産出が可能であるとされているからだ。そのため、メルロ＝ポンティによればこの立場では、人の発話は電燈が白熱状態になるのに等しく、語の意味は刺激もしくは意識の諸状態のことである。

こうした経験主義的心理学の言語理論に対して、重要な批判的事実を提供するのが多様な失語症の症例である。こうして主知主義的心理学の見解が導入される。ゲルプとゴルトシュタインが報告する色名健忘症のベルクマンという患者は、提示された色の名称を答えられないだけでなく、様々な色の毛糸を命じられた色名に従って分類することもできない (cf. 澤田二〇二二、一〇七―一二八)。彼らの見解では、患者は言われた言葉が色に関するものだとすることを理解している以上、この観察結果が意味するのは、患者は「赤」や「青」といった語の感覚的心像を失ったわけではなく、様々な色見本を形相エイドスないし本質のもとにまとめる一般的な能力、つまりカテゴリー的作用が棄損されているということである (cf. PhP, 205)。主知主義的心理学の見方では、言語経験は、失語症患者のうちに間接的に示されるカテゴリー的能力が適切に発揮されているかどうかに存しているのである。経験主義的心理学とは異なり、主知主義的心理学は単なる因果的結合以上の結びつきをもたらす心的作用を認めるのだ。

メルロ＝ポンティによれば、これら論争的な関係にある二つの心理学的立場には、すでに述べたように語る主体の不在と語が意味を所有していないという共通点がある。経験主義的心理学では、繰り返すように、語は因果的連鎖によって産出されるため、それを自律的に産み出す語の主体は不在となり、また語の意味もその内的な力ではなく心的・生理的・物理的な現象のいずれかに置き換えられる。他方、主知主義的心理学においても、語の意味はその背後に見出せるカテゴリー的作用に属する。その意味で「意味をもっているのは思考であり、語は依然として空虚な外皮にすぎない」(PhP, 206)。すなわち、言語がその意味を指示しようとして、そうした指示は聞き手としての思考する主体 (*sujet pensant*) が行う対応関係の構成によるものでしかないのだ。このとき、言語の現象は聞き手の思考する主体に主導権があるだけで、語る主体としての話し手には自律性がなく、語る主体は不在であると結論が下されるのである。

それでは、この二つの共通点はどのような関係にあるのだろうか。この点についてメルロ＝ポンティは明確に論じていない。しかし、両者の関係はある考え方の二つの側面であると言える。その考え方は本稿における(一―a)にはかならない。すなわち、二つの心理学において見出せる共通点を析出することで、メルロ＝ポンティは(一―a)言語の像テーゼを彼なりの仕方で見出せる共通点を析出することで、メルロ＝ポンティは、語の意味が別のところに措定されている言語の像テーゼを言いかえたものと解釈できる。すでに確認したように、伝統的な言語理論では、基本的に言語を構成する感覚的記号ないし心像と、それが表示するもの(現実や観念など)を区別する。これは、前者にはそれ自体のうちに意味がないことを表している。なぜなら、言語を構成するものがその意味そのものであるなら、表示するという働きが不要となるからだ。また、語る主体の不在についても、メルロ＝ポンティが言わんとするのは、語ることに固有な働きがあることが認められていないということである。こうした語る主体の不在は(一―a)にも含意されている。なぜなら、(一―a)で求められて

いるのは、像が反映するものをいかに忠実に反復できるかであり、像を産出する者に主導的な働きを認めていないからだ。かくて語が意味を持たず、語る主体が不在であるという見解は、言語の像テーゼの内実を分析したものである。したがって、「表現としての身体とパロール」という章の冒頭で行われているのは、(一―a)の抽出なのである。

先の議論に続いてメルロ＝ポンティは、こうした心理学的言語理論では十分に説明できない事象を記述し、そうすることでその主張の妥当性に疑義を呈す。こうした立論構造が何を意味するのかについては後で戻るとして、ひとまず彼の議論を辿ろう。佐野(二〇一九、一八一―一八二)が指摘するように、ここでは主に二種類の事象が指摘される。第一に、思考は自身を完成させるために表現へと向かうという事象だ。我々は、言語で表現できるときに初めて自分が何を言いたかったのがはつきりしたと感じ、逆によく知っているものでもその名称が思い出せなければ、その対象がどこか定まっていなかったかのように感じることもある。こうした経験的事実が示すのは、語は指示する意味を引き起こす像ではなく、それ自体が意味を運搬しているということにほかならない。これからメルロ＝ポンティは、「パロールは語る者においてすでに出来上がった思考を翻訳するのではなく、それを完成させる」(PhP, 207)と結論づける。これが何を意味するのかに関しては後で言及する。

第二に取り上げられる事象は、他人の言葉を通じてそれまで持っていなかった思考を獲得できるというものだ。思考の伝達について、メルロ＝ポンティは心理学的言語理論の考え方を次のようにまとめる。

一見したところ、聞かれた言葉は聞き手に何ももたらさないと考えるかもしれない。語や文に意味を与えるのは聞き手であり、語や文の結合さえも外部からもたらされたものではないということだ。それというのも、聞き手のうちに自発的にその結合を実現する能力がなければ理解されないからである。(PhP, 207-208)

ここでは、(1-1b) 言語の私的な思考の伝達テーゼが検討されている。言語が道具として各人の思考の伝達に寄与していると考えた場合、聞き手は常に意識のうちにある言語的心像を一定の規則に基づいて観念へと翻訳するという考え方に至る。しかしこうした見方では、なぜ外国語や難解な文章から新たな思考を獲得できるのかが説明されない。なぜなら、この場合、翻訳されたものもともとの考えと同じかどうかを聞き手は決して判断できないからである。同一であるかどうか不明であり続けるなら、それは自分で考えついただけの可能性に留まり、その限りにおいて他者から学んだという経験には相当しないのだ。メルロ＝ポンティは、言語理論における(1-1b)を指摘しながら、こうした考えでは、言語を通じて思いついていなかった考えを他者から学ぶという、認められるべきコミュニケーションの現実が見かけのものにしかならないことを論じているのである。

以上の議論からメルロ＝ポンティが導き出すのは、「語は意味を持つ」(PhP, 206)という主張である。言語は認識された対象を表示する空虚な像ではなく、それ自体のうちに固有の意味がある。彼はこの点を論じるうえで、ピアジェの記述を参照する。ピアジェによれば、子どもにとって対象は、名づけられたときに初めて知られ、「名称は対象の本質であり、その色や形と同じ資格で対象の中に宿る」(PhP, 207)。こうした記述は、「語は意味を持つ」という主張によってメルロ＝ポンティが、本稿における(1-1a) 言語の創出的形態化テーゼを主張していることを示している。実際、彼は次のように述べる。

表現作業が成功した場合、それは単に読者ならびに文筆家自身に備忘録を残すだけでなく、意味を、文章の核心そのもののうちに一つの事物として存在させ、多数の語からなる組織のなかで生きるようにさせ、新しい感覚器官として文筆家あるいは読者の中に据えつけるとともに、そうした表現は我々の経験に対して新しい領野あるいは新しい次元を開く。(PhP, 212-213)

パロールは単なる出来上がったものを表示する像でない。それは主体が世界と交流するための「新しい感覚器官」として働き、経験の原像を主体にもたらず。既成の世界を反復的に反映せず、有意義なままとまりが新たに生じるという意味で「新しい領野もしくは新しい次元」が開かれる。ここに、先に確認したカッシーラーおよび彼が解釈するフンボルトと軌を一にする見解が見出せる。

またここで指摘したいのは、他者との言語的伝達もこの(二一a)を主張することで捉え直そうとされている点である。

私が最初にコミュニケーションを取る相手は、「表象」や思考ではなく語る主体であり、ある特定の存在のスタイルであり、その人が向かう「世界」である。(PhP, 214)

言語は単に他者のうちに既得の観念を喚起させるわけではなく、話し手が捉える世界との関わり方を聞き手の経験のうちに生じさせる。他人の語りを理解することは、思考の操作によって演繹される命題を把握することではなく、「私の固有の実存の同時的転調」、「私の存在の変容」(PhP, 214)である。すなわち、他人のパロールによって世界が新たな仕方で形態化することなのだ。したがって、先に言われていた自身の思考の完成も、言語が意味を持つと同様に、言語自体が形態化として意味を作り出すということなのである。

以上の議論が正しいとすれば、『知覚の現象学』の積極的な言語論は、伝統的な議論と照応させると(二一a)と(二一b)を批判し、(二一a)を示すものである。

四 パロールの歴史公共性をめぐって

前節では、『知覚の現象学』において(二一a)と(二一b)が批判され、代わりに(二一a)が主張されていることを明らかにした。それでは、(二一b)言語の公共的保存テーゼはこの著作に見出せないのだろうか。この点に関してメルロ・ポンティは微妙な態度を取り、明確には主張していないと言わざるを得ない。このことは、パロールを、像ではなく思考を完成させる(二一a)としての言葉と、そうした行為の蓄積によって受け継がれた言葉とに区別する、よく知られた議論を検討することで明らかになる。彼は次のように述べてパロールを二つに区別している。

語るパロールと語られたパロールに区別することもできるだろう。前者は、意味志向が生まれつつある状態のうちにあるものだ。〔…〕このパロールは自然的存在に対する我々の実存の超過である。しかし、表現行為は言語的世界と文化的世界を構成し、存在の彼方へと向かっていたものを再び存在に引き戻す。ここから、既存の財産のように利用可能な意味を使用する語られたパロールが生じる。こうした既得物から出発して、その他の真正な表現行為——文筆家や芸術家や哲学者のそれ——が可能となる。(PhP, 229 強調引用者)

メルロ・ポンティによれば、語るパロールにおいて意味をそれ自体のうちに持つ言語が創り出され、それによって思考は完成し、当の語る主体や他者に新たな世界の領野が開かれる。それに対して、語られたパロールとは、語るパロールがいつでも利用可能なものとして流布したときに成立する言葉とされる。重要なのは、それは陳腐な表現として価値がないわけではなく、むしろこうした「既得物」によって、言語行為者が一次的な語るパロール

を創出することができるようになるという点である。言語の歴史公共同体のうちで初めてひとは、言語を用いて新たな意味へと向かい、世界との関係を形態化できる。ひとは言語行為を遂行するとき、その言語によって世界が形態化するようなあり方で言語を用いなければならないが、それは歴史公共同体のうちに参与していることのできるようになる。作家や哲学者が行うように、すでにある語を用いながらもそこから新たな形態化を行うことは可能であり、その都度新しく作り出される造語だけでコミュニケーションを取ることではできないのだ。

しかし、言語の歴史公共同体のうちに参与しているときであつても、その言語は単に認識したものの反映でなく、少なからずそれが世界を形態化するような仕方、つまり語が意味を持つという仕方で経験されなければ、極端な場合その語は失語患者が経験するように意味を伴わないただの空虚な音声としてしか経験されない。この点で、歴史公共同体の言語は形態化することのできる主体の力能に依存している。先行研究でも繰り返し指摘されるように、ここに語るパロールと語られたパロールの循環関係が見出せる (c.g. Hays 2008, 191)。以上の検討から言えるのは、『知覚の現象学』のうちに (二一a) と類似した歴史公共同体における言語の存在の必要性という見解を見出すことはできるが、それは (二一a) に依拠した限りでのものではないということだ。指摘されるのはあくまでも「パロールを通して行われる他人の思想の継承、他人への反省、他人に倣って、考える能力が存在する」(PhP, 208 強調原著者) 点であり、それは個人の言語行為に先んじて歴史的公共同体に参与する必要があると明確に言っているわけではない。こうして、すでにいい表され、ある言語共同体のうちにある言語は「二次的な表現」(PhP, 297) として、次の引用箇所に見られるように、あくまでも二次的な思考を呼び起こすのに用いられる、とされるのである。

我々は言葉が制度化された世界の内に生きている。こうした月並みな言葉に対して、我々はすでに形成さ

れた意味を自分自身の内に所有している。こうした言葉は、我々のうちに二次的な思考しか呼び起こさない。この思考は、それはそれで我々に表現の真正な努力を何ら要求せず、聞き手がそれを了解するのにも何ら努力を要求しない言葉に翻訳される。(PhP, 214 強調原著者)

「言葉が制度化された世界」に言及することで、一定の言語表現が既定のものとなり、苦勞することなく思考が伝達される場面が提起されている。前節では(二一b)を伝統的な言語理解に対する批判的観点として見出したが、こうした態度で言語の歴史公共性が主張されているわけではない。メルロ＝ポンティが言語の歴史公共性を取り上げるのには別の目的がある。彼の考えでは、伝統的な言語理論が(一一a)を認めるのは、言語の歴史的沈殿化が原因である。つまり、(二一a)から(一一a)への移行において歴史的制度化の作用が働いていると考えているのだ。この点でメルロ＝ポンティは、言語の歴史性が持つ、パロールの真正な働きを覆い隠す作用に警戒しているのである。

とはいえ、こうした言語の歴史性に対する警戒は言語の歴史公共性の否定ではないことが、後になって明確に論じられるようになる。この点を明らかにするために「言語の現象学について」の関連する箇所を検討しよう。この論致では、本稿のはじめにでも言及したように、言語活動の結果を科学的に観察するだけでは言語を理解したことにはならず、また言語活動をその主体の心理的経験として捉えるだけでは言語の体系性が捉えられなくなると指摘される。そのうえで、言語の通時的側面と共時的側面を接合することのできるパロールの現象学を行う必要があると述べられる。そして次の箇所が注目に値する。

語る主体にとって表現するとは意識化することである。主体は単に他人のために表現するのではなく、自

分が向かっているものを自ら知るために表現する。「…」どのようにしてそうなるのか。意味志向が、私の語るラング、私の継承している文書や文化の総体が表している自由に使用しうる意味の体系の中に或る等価物を探し出すことによつて、自らに身体を与え、自らを知ることによつてである。(S, 113)

まず、これまで見てきた議論と同様に、パロールによつて表現することで思考が完成する点が主張され、(2-1-a)として言語を捉えることの重要性が言われる。そして自分が参与している言語体系としての歴史公共同体のうちに、主体は自らが語り出すものに相応しい言語的な等価物を探し出せるとされる。『知覚の現象学』で記されていたように、パロール(特に「語るパロール」)はすでに文化的産物として主体が使用できる語と共に可能となるのだ。次に、そうした既存の文化における産物と語る主体との関わりが問われ、メルロ＝ポンティは自身の考えを述べる。

しかしすでに自由に扱えるものとなつているものもろもろの意味は、なぜ、どのようにして、またどういった意味でそうなつていいのか。それらの意味がそうなつたのは、それらがその時代に、同種の表現作業によつて、私が頼ることのできる意味、私が持つ、意味として制度化されたときである。(S, 113 強調原著者)

歴史公共同体における言語が語る主体の扱えるものとなつていく理由が、同時代の表現作業によつて、意味を持つ言語として制度化されているからだと述べられている。ある特定の個人とは別に、匿名的な他の人が行う表現作業の総体として言語が生気づけられているということだ。『知覚の現象学』では制度化されているとは、二次的な思考の喚起と関わるものとして理解されていたが、ここではその身分が原本的か派生的かの関係になつていな

い。むしろ歴史公共性のうちでこそパロールは実効的になる。こうした「制度」の内実を本稿で十分に明確化することはできないが、その直後に、歴史公共性における言語を利用して、いままで一度も言われてこなかったことを語るときに表現が行われると言われる点を踏まえれば、制度化された言語は、語る主体が語るための足場のようなものとして、特殊な表現に先立って意味を保存する全体であると少なくとも考えられる。ここに(二一b) 私的な思考の伝達に先立って、それを条件づける歴史公共性という言語の性格が、メルロ＝ポンティの議論においても見出すことができるのである。

おわりに

本稿ではメルロ＝ポンティにおけるパロールが持つ哲学的意義について、言語の創出的形態性の観点と歴史公共性の観点から明確にすることを試みた。その準備として伝統的な二つの主要なテーゼを哲学史と心理学史における議論から定式化したうえで、二〇世紀前半にあった伝統的な言語理論に対する批判的なテーゼを同様に二つ論じた。これらの四つのテーゼを枠組みにして、メルロ＝ポンティの見解の内実を検討すると、メルロ＝ポンティの言語論は、当初(二一a)と(二一b)を(二一a)の観点から批判していたが、その後になって(二一b)の観点が論じられるというものだと言えよう。

しかし、(二一a)と(二一b)の二つのテーゼは、どのように関連しているのか。両者の関係を解釈するうえで重要な概念の一つが、本稿では簡単にしか言及できなかった「制度(化)」という概念である。『知覚の現象学』の出版後、メルロ＝ポンティはF・ド・ソシユールの言語論を精緻に読解し、またゴルトシュタインがフンボルトの考えを受け継いで論じた「内的言語形式」の哲学的意義を積極的に捉える。こうした探究は一九五四-

五五年のいわゆる「制度化」および「受動性の問題」講義において、人間の象徴機能の観点から統一的に論じられるようになる。本稿は、「制度(化)」をめぐる議論の内実を捉え、さらにはひとが言語と関わる際の二つの側面が持つ関係を明らかにする哲学的な考察に寄与するだろう。

文献表

- Bimbenet, É. (2004) *Nature et humanité : Le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Vrin.
- Cassirer, E. (1933) « Le langage et la constitution du monde des objets », traduit par P. Guillaumns, dans *Journal de psychologie normal et pathologique*, XXXe, pp. 18-44.
- (2010) *Philosophie der symbolischen Formen: Erster Teil Die Sprache*, Felix Meiner. 『シンボル形式の哲学 Ⅰ』第一卷言語 生松敏三・木田元訳、岩波書店、一九八九年。
- Hass, L. (2008) *Merleau-Ponty's Philosophy*, Indiana University Press.
- James, W. (1918) *The Principles of Psychology Volume I*, Henry Holt and Company.
- Locke, J. (1975) *An Essay Concerning Human Understanding*, edited with an introduction, critical apparatus and Glossary by Peter H. Niddich, Oxford at the Clarendon Press. 『人間知性論』(一)～(四)大槻春彦訳、岩波書店、一九七二～一九七七年。
- Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard. 『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、改装版(二〇一八年(初版一九八二年))。* PhP 略記。
- (1960) *Signes*, Gallimard. 『シーニユー』竹内芳郎監訳、みすず書房、一九六九年。『シーニユー2』竹内芳郎監訳、みすず書房、一九七〇年。
* S 略記。
- Noble, S. A. (2014) *Silence et langage : Genèse de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill.
- Praget, J. (1984) *Le langage et la pensée chez l'enfant : études sur la logique de l'enfant*, Denoël/Gonthier.
- Yygotsky, L. (2012) *Thought and Language*, revised and expanded edition, translated by Eugenia Hanfmann, Gertrude Yakar and Alex Kozulin, edited

and with a new foreword by Alex Kozlin, The MIT Press.

神野慧一郎(二〇一一)『イデアの哲学史—啓蒙・言語・歴史認識』ミネルヴァ書房。

佐野泰之(二〇一九)『身体の黒魔術、言語の白魔術—メルロ＝ポンティにおける言語と実存』ナカニシヤ出版。

——(二〇二三)『意識の沈黙と言語のざわめき—バラン、サルトル、メルロ＝ポンティ』『メルロ＝ポンティ研究』二七号、三九―五八頁。

澤田哲生(二〇二二)『メルロ＝ポンティと病理の現象学』人文書院。

ニューマン、フレド&ホルツマン、ロイス(二〇二〇)『革命のヴィゴツキー—もうひとつの「発達の最近接領域」理論』伊藤崇・川俣智路訳、新曜社。

新曜社。

野々村伊純(二〇二三)『世界に対する関係としての言語について—失語症研究に関するメルロ＝ポンティの考察を通じて』『メルロ＝ポンティ研究』二七号、七五―九一頁。

研究』二七号、七五―九一頁。

波多野和夫ほか(二〇二二)『言語聴覚士のための失語症学』医歯薬出版株式会社。

註

1 略号については文献表を参照。以下の引用文はすべて、邦訳のあるものについてはそれを参考に行っているが、新たに原文から訳し起こしているため必ずしも既訳の文言と一致していない。

2 メルロ＝ポンティはP・ギョームによってフランス語訳されたものを『行動の構造』で参照している。そのため、本稿でもこのフランス語訳版を参照する。

3 メルロ＝ポンティは、『行動の構造』においてこの論攷を参照しながら、パロールとしての言語は人間の実存と内的な関係にあると論じる (cf. 野々村二〇二三)。

4 メルロ＝ポンティの言語論の背景には、他にB・バランやJ・P・サルトルによる議論もある (cf. Noble

2014; 佐野二〇二三)。

- 5 ジェームズ自身は、言語に必要な要素に対応する独立した「器官」が脳にあることを認めず、むしろ意識を流れとして捉えようとする。
- 6 ヴィゴツキーのピアジェ批判は、ゴルトシュタインの『言語と言語障害』（一九四八年）において取り上げられており、メルロ＝ポンティもこの著作を通して概略を知っていると推察できる。また、メルロ＝ポンティのピアジェ批判には、ヴィゴツキーのものと同じところがある。
- 7 ただしメルロ＝ポンティは、とりわけゴルトシュタインのうちに主知主義ではなく「実存主義」的な側面を見出しており、その点で彼に対する評価は両義的である。
- 8 メルロ＝ポンティによるフンボルトの「内的言語形式」の解釈については野々村（二〇二三）を参照。

〔付記〕本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108、JSPS 科研費 23KJ0442 の支援を受けたものである。